
マリオネットは納豆の糸で

弥招 栄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マリオネットは納豆の糸で

【Nコード】

N1095C

【作者名】

弥招 栄

【あらすじ】

恋って、人を操り人形のようにしてしまっんだ 「なにかっこつけてんのよ、ぶぁーか」 ああ、こいつもう酔ってるよ……

「なんでそんなもの頼むのよ。ぶあつかじゃないの!？」

もちろん僕だってわかってますよ。“ばか”を“ぶあか”って発音する女、いや、男を含めたって、そんな奴いないってことは。

わからないのは、なんで僕がそんな罵声を浴びせられないとならないのかってことで……

僕が頼んだのは、日本盛の熱燗二合徳利と揚げ出し豆腐、アボガドのサラダ、そして納豆巻き

「それよ！」

……へ？

「なんで納豆巻きなんか頼むのよ」

いや、まあ、ナマチュウを一杯飲んだだけで顔を真っ赤にしてわめいている彼女は、父方も母方も兄嫁さんさえも酒豪ぞろいの中で育った僕にしたら、新鮮で、しかもとてもかわいくて、見てて飽きないのだけでも……

居酒屋で納豆巻きを頼むのに、それが食べたい以外のどんな理由が必要なのかは、僕のほうが聞きたい。

「あんだ、この店出たら、どうするつもり？」

どうするって、帰るよ。

「あたしの家まで、送ってくれるんでしょ？」

まあ、もう遅いしね。

「で、別れ際に、いつもみたいにやすみのキスをするでしょ？」

そうそう、キスまで持っていくのにどれだけ苦労したか……って、そんなことをそんな大声で。

「そのキスが、納豆臭かったらどうするのよっ！」

臭かったら……じゃあ、彼女が頼んだニラレバやらオニオンサラダやら、ましてやにんくの素揚げやらはどうなるんだろう。

「なによ。あたしの息が臭いっていうの？」

そんな、滅相もない。僕は君の臭いが、訂正、匂いがとっても好きさ。

「……まあ、においはいいわ。あたしも納豆のにおいは嫌いじゃないし」

うわ、照れてるよ、こいつ。かわいい！

「問題は、糸よ」

へ？

「キスをしたら、糸が引くのよ？」
いや……

「二人の唇と唇の間を、ネトーって」

そんなことは……だってまだ酒も飲むし、ここから彼女のワンルームまで、歩いて二十分はかかるし。

「あたし、べたべたするのって、いやなの」

いつも寒いつてしがみついてくるのは、誰だっけ？

「あたしは糸引かないわっ」

引かなくて幸いだよ。僕もそんなに物好きじゃない。

「でしょっ！？」 糸を引くなんて許せないわよねっ！」

あー、はいはい。

結局僕が二合徳利を四本空ける間に、彼女はソルティ・ドッグとモスコミールとスクリュードライバーと、あとはブラッディマリ―を半分だけ飲んで、店を出た。

側溝に落ちかけて僕に引き止められたり、電柱にぶつかって一生懸命謝っているのは、やっぱりなにかのギャグのつもりなのだろうか。

彼女の鼻歌に合わせていろんな犬が遠吠えを繰り返すのは、結構近所迷惑なんだろうな、とは思っけど。

「おっ、ごくらー」

それでも自分の家はわかってるらしく、見慣れた十階建てのマン

シヨンの前で、彼女はくるりとターンを決めて敬礼した。

と思っただら、おとと、とよろける。僕はあわてて彼女を抱きとめ、そのまま……

「だめーっ!!」

え？

「なつとー」

いや、そんな力ずくで振り払わなくても。で、どこへいく？

「そこで待つてなさい」

はい。

ポチのごとく立ち尽くす僕を置いて、彼女は小走りで少し向こうにあるサークルへ。あ、また看板にぶつかって謝ってるよ。

何を買に行ったのかな？ もしかして、円くてくるくると丸めてあつて、ぷうって膨らませられる……

うーん。キスで明るい家族計画はないか。

お、帰ってきた。

「はい」

なんだこれ？

「わかんない？」

そんな憐れむような目で見ないでくれよ。歯ブラシじゃないか。

「あんたのよ」

僕の？

「糸を引かないようにね。磨きなさい」

だって、水もないのに。っていうか、糸は引かない

「仕方ないわね。いいわよ。洗面所、貸してあげるから」

いや、だから……って、え？ 部屋に上げてくれるの？

「歯を磨くだけだからね」

はいはい。

「ハイは一回でいいの」

おお、彼女のおいだ。

「洗面所はそこ。歯磨き粉は使っていていいからね」
はい。

「素直でよろしい」

大丈夫かな。ドアを頭突きで開けてったぞ。

まあいいや。あいつの家だし、どぶにはまることもないだろ。おっ、ユニットバスじゃん。ここでシャワー浴びたりしてるんだ。…結構きれいにしてるな。

がらがらぺつ。あー、すっきりした。これで糸は引かないぞっと。おーい、歯を磨いたよー。あれ、返事がない。おーい。

そーっとドアを開けてみると、八畳のフローリングの一角を占めるベッドの上で、彼女は気持ちよさそうに寝息を立てていた。

もこもことしたダウンを着たまま、片足をベッドからだらしなく落として。

ほのかに上気したままの頬。

しどけなく開いた、唇。

あー、もう我慢できない。

彼女の唇に、軽く、キス。

そして彼女は薄く目を開いた。

目にかかる前髪をかきあげて、僕の目をじっと見つめ

再び目を閉じ、微笑んだ。

あれ？ 何かが僕の心に引つかかる。うーん、いいやつ。

もう一度、今度はついばむようなキス。もちろん、糸を引いたりなんかしない。だけど

僕はきつと、彼女にその糸で操られていたんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1095c/>

マリオネットは納豆の糸で

2010年10月9日18時38分発行